

「戦争法案阻止」私も諦めぬ

主婦

(愛媛県 88)

安全保障関連法案に反対する学生デモの姿を特攻で死んだ先輩・同輩らの無念に重ねた加藤敦美さんの投稿(18日)を読み、思わず涙した。加藤さんの一言一句に、あの戦争さえなければ、と思わずにいらなかった。その前日の天声人語には「まだ参院での審議がある、諦めてはいけない」との趣旨の記事をフェイスブックに書いた元弁護士黒澤いつきさんが紹介されていた。私も思い直した。

衆院採決数日前、戦争法案に反対する署名用紙が婦人団体から届いた。今さらのような空しさがある

り、そのままにしていた。でも諦めてはいけない。普段は政治的活動に縁遠い私だが、友人や子どもたちにも署名をお願いし15人分集めた。用紙と一緒に届いた安倍首相への「レッドカード」も書いた。はがきより大きく、官邸の住所と「内閣総理大臣 安倍晋三様」と宛名が印刷されている。「夫の叔父は21歳で戦死。私の伯父は未娘の顔を見ないまま戦死。私の父は4歳の時に戦病死」と書き、「こういう事が二度とおこりませぬように」としめくくって投函した。

私には大切な9人の孫がいる。この子らの未来を安倍首相に委ねるわけにはいかない。

「あの国が悪い」という前に

主婦

(愛知県 31)

高校生の頃、研修旅行で沖繩に行った。そこで戦争体験者のガイドさんと3日間を共に過ごした。ガイドさんの話は、米軍がいかに残酷なことをしたか、いかに日本の被害が大きかったか、という話が軸だった。沖繩研修を終えた私は「米軍って、すごく悪いんだ」という印象を抱いたことを覚えている。

しかし、戦後70年の今、私たちが本当に学ばなければいけないのは、誰が悪かったか、という話ではないと思う。戦争になれば、日本だって、どこの国の人だ

って残酷になってしまうのだ。それが戦争の恐ろしさなのだ。

もちろん、戦争中の米軍や日本軍の行ったことを事実として知ることは大切だ。しかし誰が悪いかという話ではなく、どうして戦争になったのか、どうすれば戦争にならないのか、互いの国の歴史や宗教、政治を学んだ上で考えることが大切なのではないか。

「どこの国が悪い」と相手手を憎む気持ちがあれば、それがまた戦争につながりかねない。戦争を前提にすることなく、世界中が平和であってほしい、と心から願っている。